

び市川市ナン栽培農家に対する聞き取り調査の結果を中心に行なった。

## 2. 研究の結果

①千葉県昭和54年のナン結果樹面積は1,280 ha で全国第四位である。千葉県は関東地方に集中している長十郎・幸水を中心とした赤ナン産地の一つである。

②千葉県のナン栽培地は県の北西部一東葛飾地域に集中している。その中心の一つに市川市がある。市川市にナンが導入されたのは江戸末期であるが当時は市の中心部、八幡が栽培の中心であった。しかし、その後明治27年の総武線の開通などに伴う中心部の宅地化の進展により、ナン栽培地は徐々に市の北部、特に北東部の台地に移動していった。北部はもともと野菜作中心の地域であったが、ナンの高価格安定、野菜作ほどの労力を必要としないなどの点が評価され、徐々にナンが浸透していった。

③都市化の進展にもかかわらず、市川市のナン栽培面積は微増を続けている。この都市化に対しての根強い抵抗力は、現在の栽培の中心地、北部の大町・大野町・柏井町などが市街化調整区域となったこと、農家がナン栽培に強い意欲をもっていることに起因する。

④市川市ナン栽培における都市化の影響としては、まず栽培環境の悪化が挙げられる。プラス面では直売の増加がある。市の中心部に近い地域では近所・知り合いにのみ少量販売しているが、北部の大町では昭和50年代前半から観光農業として

の沿道直売が行なわれている。これは自然環境のよい大町の特性をうまく生かしているが、店舗が多く競争が激しいこと、中心となる県道にそれほど交通量がないことから、今後の発展は期待できない。

⑤市川市に特徴的な動きとして通勤栽培がある。これは都市化の進展に伴い市内でのナン園の維持拡大を困難と見た大野町・柏井町・大町の上層農家21戸が、県などの助成を受け昭和44年より香取群下総町・同栗源町に土地を求めナン園を造成、通勤して栽培を行なうものである。しかし、その後45年に新都市計画法によって大町・大野町・柏井町などが市街化調整区域となったため、市川市内のナン栽培は存続することとなった。この誤算と通勤時間の負担、通勤栽培地での適期管理の難しさなどのために通勤栽培は当初の期待通りにはうまくいっていない。

⑥今後の市川市ナン栽培の動向は後継者の有無との関連が強い。農家の栽培への意欲は強く後継者の定着率がよいこと、また栽培の中心地が市街化調整区域となったことのため今後もナン栽培は存続するものと考えられる。しかし、もし現在進行しつつある鉄道計画に伴い市街化調整区域の見直しが行なわれた場合は直売重視・通勤栽培などによって生き残っていく農家と農業をやめていく農家に分かれていくことが予想される。今後は都市の緑を守るという観点からも市川市ナン栽培の存続が望まれる。

## 指宿市における観光業の発展の推移とその影響

福 留 聡 子

本論文では、霧島屋久国立公園の主要観光都市である鹿児島県指宿市を対象地域として、観光業の発展の推移を追い、地域経済や地域住民との関わりにおいて、観光業の果たす役割とその実態を明らかにすることを研究の目的とした。さらに、その問題点と将来の方向についても考察を加えた。

南国九州最南端に位置する指宿市は、一年を通

し温暖な気候と、九州でも有数の豊富な温泉、開聞岳をはじめとする自然資源に恵まれ、年間300万人近い人が訪れる観光地である。

人口3.3万人の指宿市の基幹産業は農業であり、市の北西～北東地域を中心に、甘藷・豆類・観葉植物等を栽培しているが、農家は零細経営、農家数も減少傾向にあり、近年のびなやんでいる。ま

た第2次産業には見るべきものがなく、わずかにある製造業は土産品製造が多く、観光業とのつながりが強い。全就業者数の58%を占める第3次産業においても、旅館・飲食店・土産品店・各観光施設や交通機関等、観光業にたずさわる人はかなりの数にのぼる。また、観光客が市内で消費する金額は大きく、観光業は市の経済基盤を支える産業となっている。

指宿温泉は、江戸時代から付近の農民を集める湯治場として栄えていたが、昭和28年観光ホテルの建設以来、摺ヶ浜地域を中心に旅館街が形成されていった。高度経済成長期には、国民生活の向上と余暇時間の増加に伴って、観光旅行が全国的に普及、浸透していった。この時期指宿では、観光施設の整備・宿泊施設の拡大を実施、観光地としてめざましい発展をとげた。

現在指宿では、観光客の志向の多様化・旅行範囲の広域化の影響を受けて、宿泊客の比重が低下してきている。旅行形態では、昭和40年代初期に多かった新婚客や修学旅行客が激減、かわって一般団体客が宿泊客の主流を占めている。しかし近年、全国的動向と同様に、家族・知人グループ等が増加、大規模団体による慰安旅行は減少している。宿泊客の発地は、近畿・関東など大都市圏が4割と多いが、九州内からの客が増加傾向にあり観光客全体では高い割合を占めると思われる。この状況を反映して、利用交通機関は自家用車が圧倒的である。旅行時期は、3月と8月にピークがあり、6月・12月は観光客が少ないが、全国的にみると、指宿地域は全年型に近い観光地といえる。

宿泊施設のうち大規模なものは、比較的新しく、既存の温泉街より離れて立地している。これらは

独自で付帯施設の充実に努め、旅行業者を通して広い市場から団体客を中心に安定した集客を行っている。一方中小旅館の多くは、古くから温泉街に立地、観光集落を形成してきたが、施設整備や宣伝の点で大規模ホテルに劣り、経営は苦しい。

観光客の流動状況では、鹿児島市や霧島、宮崎との結びつきが強く、福岡—長崎—熊本—大分の九州横断ルートとは別の、閉鎖的のルートを持つ。しかし、将来九州自動車道の完成によっては、福岡—熊本—南九州の縦断ルートを形成し、北部九州と結びつきを強める可能性もある。

昭和40年代急成長した指宿も、オイルショック、沖縄返還、海外旅行の大衆化、新幹線博多開業の影響をうけ、50年代に入ると新婚客をはじめとして観光客が激減した。それまで自然資源に頼り、人文資源の開拓やサービス向上に努めることなく、宿泊施設の量ばかり増大させた指宿の痛手は大きかった。地域住民の生活環境保護や、地元産業の育成に尽さなかったため、指宿の観光業は市民の真の理解と応援を受けられず、今日の停滞を招いたといえよう。

今後はそういった点を反省し、行政機関と観光関連産業、そして指宿の主役である市民が一丸となって、温泉保養観光都市を目指すべきであろう。

市当局等の努力により、幸いここ2～3年は、観光客数がもちなおしつつある。この機会に、中小旅館をはじめとする人々は、他力本願的考えを捨て、少しずつでも工夫努力していくことが望まれる。そして地域住民にとって住みよい町づくりを考えていくことが、よりよい観光地形成と市の発展につながるといえよう。

## 秦野市における花き温室園芸の変遷と農業構造

古川京子

神奈川県秦野市は、現在もたばこの産地として知られているが、実際には戦後都市化の影響を受けて、地域の農業はかなり多様化している。花き温室園芸は、そうした多様化の中のひとつとして

起きたのであるが、戦後急速に成長し、一大産地となった。本稿の目的は、この花き温室園芸がどういった要因から、またどういった過程を経て一大産地となったのか、現在はどのような状況にある